

〔D年〕復活節第6主日(2020年5月17日)

【旧約聖書日課】出エジプト記33章7～11節

7モーセは一つの天幕を取って、宿営の外の、宿営から遠く離れた所に張り、それを臨在の幕屋と名付けた。主に伺いを立てる者はだれでも、宿営の外にある臨在の幕屋に行くのであった。8モーセが幕屋に出て行くときには、民は全員起立し、自分の天幕の入り口に立って、モーセが幕屋に入ってしまうまで見送った。9モーセが幕屋に入ると、雲の柱が降りて来て幕屋の入り口に立ち、主はモーセと語られた。10雲の柱が幕屋の入り口に立つのを見ると、民は全員起立し、おのおの自分の天幕の入り口で礼拝した。11主は人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセは宿営に戻ったが、彼の従者である若者、ヌンの子ヨシュアは幕屋から離れなかった。

【使徒書日課】ローマの信徒への手紙8章28～39節

28神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということ、わたしたちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子とされるためです。30神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

31では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。32わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。33だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義とさせていただくのは神なのです。34だれがわたしたちを罪に定めることができますか。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成して下さるのです。35だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことがで

きましよう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

36「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、

屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛して下さる方によって輝かしい勝利を収めています。38わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、39高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書16章25～33節

25「わたしはこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26その日には、あなたがたはわたしの名によって願うことになる。わたしがあなたがたのために父に願ってあげる、とは言わない。27父御自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、わたしを愛し、わたしが神のもとから出て来たことを信じたからである。28わたしは父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。30あなたが何でもご存じで、だれもお尋ねする必要のないことが、今、分かりました。これによって、あなたが神のもとから来られたと、わたしたちは信じます。」31イエスはお答えになった。「今ようやく、信じるようになったのか。32だが、あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る。いや、既に来ている。しかし、わたしはひとりではない。父が、共にいて下さるからだ。33これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

出エジプト記 33章7～11節

7モーセは天幕を取って、それを宿営の外の、宿営から離れた所に張り、それを会見の幕屋と名付けた。主に尋ねるときはいつも、宿営の外にある会見の幕屋に出て行った。8モーセが天幕に出て行くときは、民は皆立ち上がり、おのおのの天幕の入り口に立って、天幕に入るまでモーセの後を見送った。9モーセが天幕に入ると、雲の柱が降りて来て天幕の入り口に立ち、主はモーセと語られた。10民は天幕の入り口に立つ雲の柱を見ると、皆立ち上がり、おのおのその天幕の入り口でひれ伏した。11主は、人がその友と語るように、顔と顔を合わせてモーセに語られた。モーセが宿営に帰っても、その従者である若者、ヌンの子ヨシユアは天幕を離れなかった。

ローマの信徒への手紙 8章28～39節

28神を愛する者たち、つまり、ご計画に従って召された者のためには、万事が共に働いて益となるということを、私たちは知っています。29神は前もって知っておられた者たちを、御子のかたちに似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くのきょうだいの中で長子となられるためです。30神はあらかじめ定めた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とした者に栄光をお与えになったのです。

31では、これらのことについて何と云うべきでしょう。神が味方なら、誰が私たちに敵対できますか。32私たちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜らないことがあるのでしょうか。33誰が神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。34誰が罪に定めることができますでしょう。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右におられ、私たちのために執り成してくださるのです。35誰が、キリストの愛からわた

したちを引き離すことができますでしょう。苦難か、行き詰まりか、迫害か、飢えか、裸か、危険か、剣か。

36「私たちはあなたのゆえに、日夜、死にさらされ屠られる羊と見なされています」

と書いてあるとおりです。37しかし、これらすべてのことにおいて、私たちは、私たちが愛してくださる方によって勝って余りあります。

38私は確信しています。死も命も、天使も支配者も、現在のものも将来のものも、力あるものも、39高いものも深いものも、他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちが引き離すことはできないのです。

ヨハネによる福音書 16章25～33節

25「私はこれらのことを、たとえを用いて話してきた。もはやたとえによらず、はっきり父について知らせる時が来る。26その日には、あなたがたは私の名によって願うことになる。私があるがたのために父に願ってあげよう、とは言わない。27父ご自身が、あなたがたを愛しておられるのである。あなたがたが、私を愛し、私が神のもとから出て来たことを信じたからである。28私は父のもとから出て、世に来たが、今、世を去って、父のもとに行く。」

29弟子たちは言った。「今は、はっきりとお話しになり、少しもたとえを用いられません。」

30あなたがすべてのことをご存じで、誰にも尋ねられる必要がないことが、今、分かりました。これで、あなたが神のもとから来られたと、私たちは信じます。」31イエスはお答えになった。「今、信じるというのか。32見よ、あなたがたが散らされて、自分の家に帰ってしまい、私を独りきりにする時が来る。いや、すでに来ている。しかし、私は独りではない。父が、共にいてくださるからだ。33これらのことを話したのは、あなたがたが私によって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・5月17日「復活節第6主日」の聖書日課主題は「キリストの勝利」。キリストが「十字架死と葬り」の後の存在として「復活」や「昇天」という表象で語られるのは、事実そのようなことが起こったためと言うよりも、「十字架死と葬り」がキリストの生涯の「敗北」ではなく「勝利」を意味するとの理解の中で定式化されたことである。「復活」や「昇天」が客観的な事実すぎないことであれば、それは信仰の問題ではなく、歴史学の問題である。「復活」や「昇天」は、十字架の死で終わり墓に葬られたキリストの生涯を「敗北」と解釈するか、「勝利」と解釈するかという問いに対して、「勝利」だと解釈するところに立つ「信仰」の表明として位置づけることが、「信仰」を「信仰」として健全に保つことになる。

・付言すると、もちろん、上述したことによって、一部のリベラルな歴史主義的聖書学者が言うように、「復活」や「昇天」の事実性を否定したり、妄想として切り捨てたりする必然性は、まったくない。なお、いわゆる「リベラル」と「福音派」の分裂は、18-19世紀以降、客観性や事実性を重んじる近代歴史学の影響を受けた歴史主義的聖書解釈（聖書が書かれた背景で歴史的事実は何だったのか？と問う聖書解釈）が神学界を席卷したことによる結果である。20世紀後半以降の「ポストモダン」の時代に至って、歴史学そのものが完全に客観性を担保した叙述をすることが不可能であることや、歴史解釈者は自身の前理解（無意識に前提としている価値観や思考の枠組み）に縛られて歴史を叙述することしかできないという、学術探求自体に対する自己相対化が神学界にも及ぶようになり、近年は、歴史主義を超克した土俵で「リベラル」と「福音派」の神学対話が始まっている。

旧約日課(出エジプト記 33章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ教正典中「律法」の第二巻、モーセを中心人物として描かれる出エジプト伝承物語の最初の巻である。12章の「過ぎ越し」でエジプト脱出が描かれると、19章で「シナイ山」にたどり着き、その後は、シナイ山での律法授与とそれにまつわる逸話が述べられて、本記は終わる。日課箇所は、シナイ山でモーセらが律法を主から授与されている間に、麓で待っていた民がアロンを動かして「金の子牛」像を設けたため、神と民との関係がいったん破綻するが、モーセのとりなしと神の赦しによって関係が再建されるという一連の物語の中に置かれた、「臨在の幕屋」の起源譚。「臨在の幕屋」は「会見の幕屋」とも訳されるように、モーセが神と会見する場として設けられた場であるが、事実上これが、「移動神殿」としての「幕屋」の原型として位置づけられている。

・「臨在の幕屋」で神とモーセの会見がなされるときに立ち現れるという「雲の柱」は、すでにエジプトを出発

して直後の描写の中に描かれていた(13:17~22)。ここでは、「雲の柱」は「火の柱」と共に民の旅路を先頭としんがりになって守られる神の象徴であり、この民に神が臨在していることを示すものである。「金の子牛」事件を経て、この神の常在が見失われたことを受けて、民の中に神の臨在を明示する象徴的な場として「臨在の幕屋」が設けられた、と理解することができる。

・モーセが神と会見することについて、「顔と顔を合わせて」と描くのは、族長ヤコブ伝承における「ベヌエルの逸話」と共通の描き方(創世記 32:31)。ところが、モーセ伝承では、この後、モーセが神の顔を見ることはできないということが語られていく(出 32:20以下)。モーセは族長ヤコブと同等であるという理解と、モーセは後の預言者や民と同等であるという理解との間で、立ち位置が揺れ動いているように思われる。

使徒書日課(ローマ8章より)

・「ローマの信徒への手紙」は、使徒パウロがまだ訪問したことのないローマの教会に宛てて、訪問を計画していること、自分を迎え入れて新しい宣教計画を後援し派遣してもらいたいことを伝えるために、自らの福音理解をまとめた形で記した書簡。パウロの執筆目的は、特に異邦人伝道を主体とした自分の宣教計画に協賛してもらうための神学的根拠づけを示すことなので、これを神学論文のように扱うことはできない。

・日課箇所は、これまでの議論に暫定的な一つの結論を述べた終わりの部分。直前では、信仰者の現実における「神の霊」に対する信頼が繰り返し強調されている(8:1~27)。パウロにおいては、「神の霊(聖霊)」はキリストと結ばれた者の現実においてもはや大前提として与えられているものであり、そのことは、単純に「アッバ、父よ」と神を呼ぶことができる事実のみから確証しうることである。そして、キリスト者がそのような自己理解を得るところにおいて、愛をもって命を保つ(復活の命にあずからせる)ようにとお働きくださる神の臨在(共にある神)を確信することは、必然である。

・28節「万事が益となるように共に働く」は、聖書協会共同訳「万事が共に働いて益となる」、口語訳「(神は・・・召された者たち)共に働いて、万事を益となるようにして下さる」と、それぞれ異なる解釈で訳出されている(文語訳は「凡てのこと相働きて益となる」で、聖書協会共同訳はこの解釈を取っている)。口語訳の訳は、ここまで述べられてきた「神の霊」の臨在した「召された者たち」を前提にした「神人協同」の解釈だが、プロテスタント神学では避けられてきた解釈。文語訳と聖書協会共同訳の訳は、伝統的な訳で、「召された者たち」にとって「益となる」ことに力点がある。これに対して新共同訳の訳は、8:18以下の全被造物の救いの計画を前提に、「万事」にとっても「益」となるように「万事」が共に働くのだとしている。被造物全体の救済は、伝統的なプロテスタント神学では論外のことであったが、近年、見直され始めている。

福音書日課(ヨハネ 16 章より)

・日課箇所は、主イエスが最後の晩に弟子たちに語られた教えの終わりの部分とされている箇所。この後の 17 章にはいわゆる「大祭司の祈り」が置かれている。そこで、弟子たちはここに至ってようやく、主イエスの語られた言葉の意味を理解し始めたということが描かれるが、それは、弟子たちの理解が十分であったということの意味するものではない。実際、ここでは、あらためて主イエスは、弟子たちの離散を予告されたと描かれ、これで弟子としての訓練期間が終わったと誤解されることを回避しようとしている。

・そうであっても、この後(17 章)、主イエスは弟子たちとご自身と御父とが「一つ」に結ばれるという信仰の現実がまもなく実現することを、祈りの形で指し示している。そこで重要になってくる視点が、たとえ弟子たちが離散してしまったとしても、「わたしはひとりではない。父が、共にいてくださる」という主イエスの立ち位置になる。この御父と主イエスとの関係性の中に弟子たちも同じように立たされるようになるところにこそ、弟子たちが苦難のある世にあってもなお平和を得ることへと勇気をもって前進していく原動力があるのである。

・「勇気を出しなさい」は、「安心しなさい」(マタイ 14:27=マルコ 6:50、マルコ 10:49)、「元気を出しなさい」(マタイ 9:2、同 9:22)とも訳され語。初代教会で、主イエスの定型句と受け止められていたのだろう。

来週の誕生日 (5 月 17 日~23 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-11 番「感謝に満ちて」(= I -2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンカルトの作詞作曲。1630 年ごろ自分の子供たちのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自由曲に用いている。

・21-531 番「主イエスこそわが望み」(= I 358「こころみの世にあれど」)は、8 世紀頃のアイルランドの修道院に遡るとされる古いアイルランド語讃美歌で、20 世紀初頭に英訳されたアイルランド民謡集に収録されてから英語圏で広く讃美歌集に採用されるようになった。『讃美歌 21』では英語 3 節版に基づいて改訳されている。

・21-541 番「また会うその日まで」(= II -23「かみとも にいまして」)は、465 番(I 405)「神ともにいまして」と同じ原歌詞に、ヴォーン・ウィリアムズの曲が付けられた讃美歌で、原歌詞により忠実に訳し直されている。英語原歌詞は 19 世紀米国会衆は牧師ランキンが電動集会のために作詞。米国の野外伝道集会では閉会時に伝道者を見送る歌として多用され、現在でもメソジスト等一部教派で「閉会の歌」として讃美歌集に収められている。

21-11「感謝にみちて」**Nun danket alle Gott**

1. Nun danket alle Gott, / Mit herzen, mund und händen, / Der große dinge thut / An uns und allen enden, / Der uns vom mütterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetzund gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm leben, / Ein immer fröhlich's herz / Und edlen frieden geben, / Und uns in seiner gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, ehr' und preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetzund und immerdar.

21-531「主イエスこそわが望み」**Be thou my vision**

1. Be thou my vision, O Lord of my heart,
be all else but naught to me, save that thou art;
be thou my best thought in the day and the night,
both waking and sleeping, thy presence my light.
2. Be thou my wisdom, be thou my true word,
be thou ever with me, and I with thee Lord;
be thou my great Father, and I thy true son;
be thou in me dwelling, and I with thee one.
3. Be thou my breastplate, my sword for the fight;
be thou my whole armor, be thou my true might;
be thou my soul's shelter, be thou my strong tower:
O raise thou me heavenward, great Power of my power.
4. Riches I heed not, nor man's empty praise:
be thou mine inheritance now and always;
be thou and thou only the first in my heart;
O Sovereign of heaven, my treasure thou art.
5. High King of heaven, thou heaven's bright sun,
O grant me its joys after victory is won;
great Heart of my own heart, whatever befall,
still be thou my vision, O Ruler of all.

21-541「また会いその日まで」**God be with you till we meet again**

1. God be with you till we meet again; / by his counsels
guide, uphold you, / with his sheep securely fold you; /
God be with you till we meet again.

Refrain:

- Till we meet, till we meet, / till we meet at Jesus' feet; / till we meet, till we meet, / God be with you till we meet again.
2. God be with you till we meet again; / neath his wings
securely hide you, / daily manna still provide you; / God
be with you till we meet again.
(Refrain)
 3. God be with you till we meet again; / when life's perils
thick confound you, / put his arms unfailing round you; /
God be with you till we meet again.
(Refrain)
 4. God be with you till we meet again; / keep love's banner
floating o'er you, / smite death's threatening wave before
you; / God be with you till we meet again.
(Refrain)